



みやぎ街道交流会NEWS



2011年12月27日発行



「五輪峠」位置図

「五輪峠を越える」

日本中に未曾有の大雨を降らせた台風一五号が東北地方を通過した九月二日の翌日、かねてから気にかかっていた岩手県中南部に位置する五輪峠を越えてきた。五輪峠は、遠野市の東方約一八kmにあり、遠野市と花巻市それと奥州市の三市が境をなす標高五五〇mの山岳である。

麓から峠に至る山道は、車両がやつとすれ違える程の幅で、道の両側の山の斜面から樹木の枝葉がおおいかぶさってくるような鬱蒼とした奥山の趣のある峠道であった。曲がりくねった道をおおよそ三十分ばかり登ると、全面が急に、ッと明るくなった。そこがピークの五輪峠であった。

五輪峠とは一風かわった峠名である。宮沢賢治に詳しい方は、「五輪峠」と題する、大正一三年三月二四日作の七十七行の長編詩と死後発見された四行詩(写真)の二作品があることをご存知だと思ふ。賢治はその二つの詩各々に「五輪峠とは、地輪峠水輪峠火風空の五つの峠があると思つていた。だがそうではなかつた。五輪の塔があるために名付けられたのだ。」と書いている。

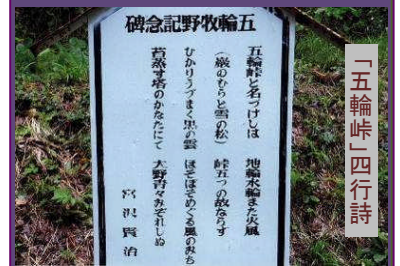
峠の南西側はやや開けた広場になっており、道路の反対側の北東側の草むらに目を向けると、その奥まったところに文化一二年(一八一五年)銘が刻まれた菩薩石碑と五輪塔が、もの悲しそうにひっそりと建っていた。

広場の片隅には、かなり大きな賢治と五輪塔」と題する説明板が建ててある。それには、賢治は花釜線(現「石釜石線」)の鱒沢駅より鮎貝く切伏集落を通つて五輪峠に達し、上大内沢を経て人首(ひとかぶ)村方面へ歩いて行ったのだらうと書かれている。そして五輪塔については、約三五〇年前、上大内沢にいた千葉日向という侍が、父の菩提を弔うために建立したものと伝えられていると書かれてあった。すると、五輪塔の横に建っている文化一二年の文字が彫られている石碑との関係は何なのだろう。五輪塔に関する伝承に疑問を感じたのだ。

五輪峠には、慶長年間に遠野郷の領主阿曾沼氏と南部氏との合戦が行われ、多くの血が流されたり、藩政時代には、「人返し」即ち他藩に逃亡した罪人を交換する場所として使われたりなど、暗く悲しい歴史があるようだ。宝暦一一年



「遠野江差線竣工記念碑」



「五輪峠」四行詩



「菩薩石碑と五輪塔」



筆者/笠原さん

笠原 弘邦 (会員)

(二七六一年)仙台藩で発刊された『奥州仙台藩遠見記(とうみき)』上下二巻の下巻の「北之方」の部に盛岡藩と仙台藩が国境(くにぎわい)を接する九ヶ村のことが詳しく書かれているが、五輪峠は五輪峠、山名は紫引山と記されている。当時はかなり重要な街道となっていたようだ。

今回訪れた当日は、小雨模様で空はどんより曇っており、遠望は全くきかなかつたが、賢治の長編詩には「……いま前に長く暗いものは、まさしく北上の平野である。あすこへんが水沢か……」とあり、晴れた日には西の彼方に、手前の山々を越えて北上から水沢平野が望めるのだろうと思つた。

盛岡と仙台の両藩が国境を接するようになったのは、天正一十九年(一五九一年)であるが、その後両藩の国境では争いが絶えなかつた。五輪峠の東方を接する小友(おとも)村では、多くの金山から金鉱石が発掘された。そのため、その金をねらつて小友村と国境を接する仙台藩の有住(ありす)村から、大勢の堀子が越境し、金山を盗掘し始めた。これは両藩の大紛争となり、寛永一十九年(一六四二年)江戸幕府の裁定のより、改めて境界を確定することになったのである。その境界上に設置されたのが、良く知られている国(くに)境塚(さかいづか)である。それは、秋田県境の山界山(さんげやま)から駒ヶ岳、珊瑚山、五輪峠、物見山(種山)、赤羽根峠、高清水山、愛染山、五葉山、鳩ヶ峰、篠倉山、石塚峠等を境して、唐丹(とうに)湾の先迄達する延長一三〇kmに及ぶもので、その境界上に大塚九四基、挟(はさ)み塚一七組、小塚三三五基を数えたと伝えられている。その内、現存しているものは少ないようであるが、今回の旅では、その内の現存している最東端の唐丹町と平田(へいた)町をつなぐ浜街道の石塚峠にある石塚藩境印杭(はんざいかい)を訪問するのが目的の一つであったが、残念ながら風雨と時間切れのため、それは叶わなかつた。

今回は、唐丹町側の本郷石塚にある石塚峠への登り口を覗いただけであったが、その先平田口迄の間には、本郷御番所跡や石塚峠の七里塚、平田御番所跡などを探訪したい所が数多くある。それは、来春の楽しみに残しておこうと思ひ、その地を去つたのであつた。

〈二〇一一年十二月二十五日〉

ニュースで紹介したい催しや参加報告はこちら事務局までお寄せください！



〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-13-32
オーラビル2F

TEL: 022-722-3380
FAX: 022-722-3381
Mail to: miyagi-kaidou@auone.jp



『奥鹽地名集』

みやぎ街道交流会 震災復興支援フォーラム 『奥鹽地名集』講演会&観月舟 開催

10月10日(体育の日)に瑞巖寺・陽徳院において『奥鹽(おうえん)地名集』講演会を開催しました。まちづくり・地域づくりには、その土地の歴史や伝統文化を踏まえた対応が求められますが、東日本大震災の復旧・復興においても同様です。『奥鹽地名集』からは、塩竈だけではなく、隣接する多賀城及び松島も含めて、学ぶべきことが多くありました。また、当日は、“陰暦九月十三夜”の栗名月にあたることから、講演会終了後に松島湾「観月舟」に乗船して、霊場松島と共に古人の風情を偲びました。その概要を報告します。

◇ 開会に先立ち、藩祖政宗公の正室・陽徳院(愛姫)の仏前で、東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りして、黙祷を捧げました。

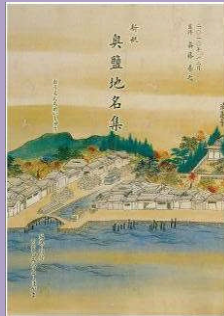


講師の斎藤教授

◇ **基調講演** 「『奥鹽地名集』から多賀城～塩竈～松島を考える」と題して、講師を斎藤 善之氏(東北学院大学経営学部教授)にお願いしました。

最初に、特定非営利活動法人「NPOみなとしほがま」古文書部会が、部長である斎藤善之教授の熱心な指導のもと、平成16年から230回余り(足かけ5年)の活動を経て、『奥鹽地名集』を読み下し、現代語訳すると共に現地調査を行い、その成果を『新釈 奥鹽地名集』として、平成22年12月に出版した。また、『奥鹽地名集』作者の鈴木三郎治宜見や書誌的位置などについて説明がありました。

その後、『奥鹽地名集』の中から、塩竈市内の坂、仙台への道、松島への道として遊覧客を運ぶ茶船などについて説明がありました。また、御釜神社にあるとされた梵字の刻まれた“波よけ石”について、今はなく、この石と外観がほとんど同一で御釜神社境内に現存する「八尺堂の址」の碑がそれとみてよいくであろうと説明がありました。ちなみに今回の大津波は、「八尺堂の址」碑のところでおむね止まったとのこと。



『新釈奥鹽地名集』

◇ **フォーラム** 『新釈奥鹽地名集』の解説・出版に関わった「NPOみなとしほがま」古文書部会の鈴木和榮、高橋幸三郎、三浦一泰の3氏のパネラー、アドバイザーに斎藤善之教授、コーディネーターを多賀城市史跡案内サークルの大橋光雄副会長にお願いして、“その苦勞、新たに得られた知見及び震災復旧・復興にどう活かすべきか”などについて語り合っていました。中では、「地名だけではなく残っているものを大事にして、次の時代に伝えていくことが鈴木三郎治の思いでもあり、私達の仕事だと思っている。」などの意見がありました。



◇ **団体紹介** 休憩時間を利用して、今回のフォーラムの共催団体の“多賀城市史跡案内サークル、特定非営利活動法人 NPO みなとしほがま、おくの細道松島海道”及び主催者の“みやぎ街道交流会”の代表により、活動などの紹介が行われました。



団体紹介

◇ **瑞巖寺「平成の大修理」の概況** 現在、瑞巖寺本堂は「平成の大修理」中ですが、その状況について瑞巖寺より説明予定でしたが、都合により、おくの細道松島海道の京野代表が、10月1日に松島町教育委員会及び宮城県文化財保護課により行われた現地説明会の内容について報告しました。

◇ **観月舟(海道談義)** 天気にも恵まれて、素晴らしい観月と賑やかな宴になりました。



船内の様子



森祐子さんの昔話



『奥の細道』朗読



船上からの月の出



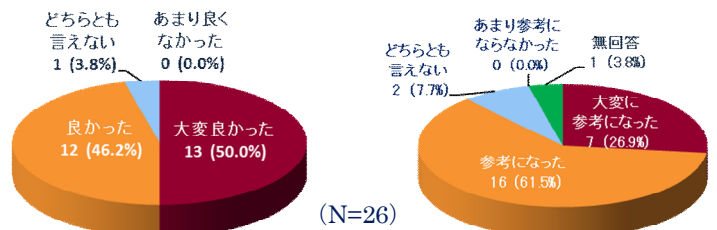
船上からの十三夜

◇ 参加者数・アンケート結果

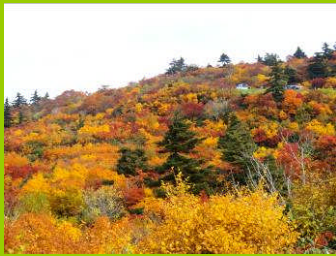
下表のとおり、延べ114名の参加がありました。

問2「基調鼎談」の内容はいかがでしたか? 問3「フォーラム」の内容はいかがでしたか?

参加者内訳	参加者数	地区別内訳					備考
		多賀城市	塩竈市	松島町	仙台市	その他	
第I部 フォーラム	68	8	14	10	28	6	2
第II部 観月舟(海道談義)	46	3	10	6	24	3	0
参加者計	73	8	14	10	33	6	2
合計(第I部・第II部延べ)	114						



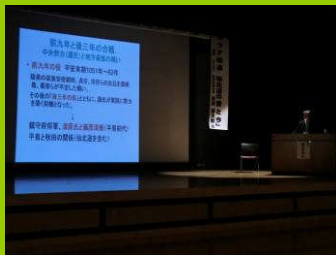
とうほく街道会議 第7回交流会「よみがえる仙北道」東成瀬大会 レポート



栗駒山荘付近の紅葉



故郷の歌でオープニング



基調講演の様子



第1分科会の様子



第2分科会の様子



手倉越絵図(横手市所蔵)

秋真っ盛りの平成 23 年 10 月 14 日(金)～15 日(土)に秋田県東成瀬村において、とうほく街道会議の第 7 回交流会が「仙北道を守る会」の主管により、仙北道(みち)を対象に開催されました。(山屋記)

オープニング 地元出身の音楽家(ソプラノ)長谷川留美子さんによる故郷をテーマにした“里の秋、紅葉、峠のわが家、ウィーンわが夢の町”の4曲独唱の後、“故郷”を参加者も含めて合唱をしました。あの大震災があった後だけに、ふるさとを思う心から涙をこらえながらの人も多く、すばらしいスタートとなりました。

基調講演 「日本一のブナ街道 仙北道の昔と今」と題して、とうほく街道会議会長・あきた山の学校代表の藤原優太郎氏が、仙北道に長く係わって来た成果を基に講演しました。古代五道(陸奥国と出羽国の軍事的な連絡路でその1つである柳沢越えは手倉越え・柏峠)や前九年合戦・後三年合戦、藩政時代の水沢と増田の交易や隠れキリシタン、そして近代の県道十文字水澤線と砂金兵記(いさごひょうぎ)の功績などそれぞれの時代背景も含めた幅広い内容について、パワーポイントを使っての説明があり、参加者からも大変勉強になったと大好評でした。

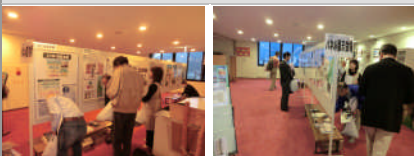
第1分科会「仙北道を考える」 パネリストを鈴木輝夫氏(仙北街道を考える会監事/奥州市胆沢区)、石川利巳氏(漆の道踏査隊長/奥州市衣川区)、佐藤豊氏(増田町文化財協会副会長/横手市)の3名、アドバイザーに藤原優太郎氏、コーディネーターが谷藤広子氏(仙北道を考える会幹事/東成瀬村)で進められました。

鈴木氏は、仙北街道を考える会では 20 年前から活動をしているが未だ調査課題があること。石川氏は、奥州藤原(平泉)の滅亡に伴い漆器の一集団が東福寺山(湯沢市駒形)に移り、江戸時代に川連漆器へ発展、更に衣川村増沢へ伝わり(石川氏のお爺さんも川連から増沢に来たそうです。)、そして増沢がダムで水没移転し、現在は平泉の漆器産業を支えているとのことで時代や地域を超えたストーリー性のある話でした。また、佐藤氏は、蔵の町増田について、周辺の重要産業が葉たばこ栽培で、仙北街道や小安街道の交差する地の利を活かした商取引の結果として、増田に富が集中したことを当時の大福帳を分析した内容の説明がありました。

第2分科会「日本一美しい村にするためには」 パネリストを加藤俊宣氏(NPO 法人日本で最も美しい村連合理事/東京都)、東屋幹男氏(NPO 法人栗駒山麓遊ゆの会理事/横手市)、谷藤トモ子氏(農事組合法人なるせ加工研究会代表理事/東成瀬村)の3名、アドバイザーに長谷川留美子氏、コーディネーターが鑑啓記氏(NPO 法人あきた地域資源ネットワーク専務理事/秋田市)で進められました。

加藤氏からは、日本で最も美しい村連合入会の資格審査で東成瀬村は 100 点満点中 70 数点で合格しており、大変素晴らしい地域資源がある。さらに最大の地域力は「学力日本一の東成瀬村」であり、地域の総合力であるとの励ましがありません。東屋氏は、1950～60 年代の高度成長に併せて、パルプ需要のため大量のブナが伐採されたが(あと杉を植林)、林道を造れないところのブナが残された。仙北道はまさに全部が緑の回廊で、山菜も多いがクマモカモシカもいて当たり前な自然豊かなところだと紹介がありました。谷藤氏は、湯沢市から嫁いだが、東成瀬村は山菜の太さや長さは他とまるで違うこと、キノコのモダシ(ナラタケ)はナメコのように粘りが強くこれにも驚いたこと。その様な材料でつくる加工品は美味しいのが当たり前で、もっと工夫してお客さんにサービスして行きたいと抱負を述べていました。長谷川さんからは、思春期のころ負い目を感じたことが、今では全て素晴らしさに転換しています。笑顔で人を迎える心、笑顔で自然を感じる心の「人の心から持って行く村づくり」がこの村には似合っていると思いますと、村を離れ、ヨーロッパなどで暮らした経験も踏まえた貴重な意見もありました。

パネル展



街道談義



[2日目] 街道探訪会 A:「仙北道を歩こう」踏査コース



姥懐



弘法の祠



ブナ林



お園の越所



曲(まが)坂の道標

[2日目] 街道探訪会 B:「仙北道を学ぼう」バスツアーコース



田子内橋



不動の滝



手倉境口御番所跡碑



首もげ地藏



昼食(コース共)

会津五街道ウォーキング「会津から元気を！」レポート

平成 23 年 10 月 22 日（土）～23 日（日）、会津五街道ウォーキングに参加してきました。ふくしまけん街道交流会などで構成する実行委員会が主催するもので、3.11 大震災の風評被害と福島県の復興も目的として開催されました。（山屋記）

シンポジウム 第 1 日目午後からが会津若松市内で開催されました。

基調講演第 1 部は、会津史学会副会長笹川壽夫氏により、「会津の街道とその周縁」と題して、会津五街道など街道の歴史やパワーポイントによる状況写真の説明と、観光資源としての街道の役割についての提言等がありました。

基調講演第 2 部は、仙台医健専門学校副校長高橋英子氏による「健康は歩いてやってくる」と題して、美しく、楽しくかつ楽に歩いて、更に健康になるというウォーキングについて、医学的な観点も含めて講演がありました。

※高橋英子先生は仙台市在住です。みやぎ街道交流会でも“格好良く・健康な歩き方について”講習会をお願いしたいと思っていますので、ご期待下さい。

その後、**パネルディスカッション**では、「街道交流と地域づくり」をテーマに地元会津で活動する団体など 6 名のパネラー（コチ イーナ／七日町通りまちなみ協議会庄司裕副会長）で、活動内容と課題、対応策等について、熱心な意見交換が行われました。

歴史街道ウォーキング 第 2 日目の歴史街道ウォーキングは、①越後街道（束松峠）②下野街道（桧和田峠～大内宿～氷玉峠）③会津銀山街道（美女峠）④会津銀山街道（吉尾峠）⑤会津まほろば街道（南コース）と、私の参加した⑥会津まほろば街道（北コース）の 6 コースがありました、

会津まほろば街道（北コース）は、会津若松から喜多方にかけて広がる田園地帯の西側丘陵縁の古道を約 12km 歩くもので、会津の古い歴史や豊かさをあらわす神社、仏閣が多くあるのにはビックリしました。霧の中から出発し、晩秋のやわらかな日差しの中を歩いたあと、ゴールの喜多方市上三公民館では、地元のお母さん達のつくった豚汁や柿、リンゴ、ブドウ、メロンと秋の味覚を腹一杯堪能し、会津特別栽培米（新米 2 合）のおみやげも頂きました。（結果、仕上げに予定した喜多方ラーメンはパスしました。）

来年は、とうほく街道会議第 8 回交流会が会津地方で開催されることとなっており、他の街道も探訪会が楽しみです。

※1 **長床（ながとこ）**：辞書では「寺院などで、板敷きの上に一段高くして、長く畳を敷いた所。」という意味ですが、新宮（しんぐう）熊野神社の長床は、九間×四間の茅葺寄棟造りで、四方とも壁のない拝殿です。鎌倉時代の遺構としては東北地方では他に類を見ないそうです。国重文指定。

※2 **会津大仏**：浄土宗 叶山 三宝院 願成寺は、嘉禄 3 年（1227 年）、法然上人の高弟隆寛律師の開山、弟子の実成房上人が開基したとされているそうです。通称会津大仏は、阿弥陀三尊であり、中尊の阿弥陀如来は 2.41m の結跏趺坐の座像で、千体仏をつけた舟形光背が特徴です。脇侍は、右が観音菩薩（1.285m）、左が姿勢菩薩（1.30m）で正座の姿です。三尊とも鎌倉初期の作で、東北地方では珍しいものだそうです。国重文指定。願成寺は立派な山門など見所豊富です。



シンポジウムの様子



新宮熊野神社長床



北野社境内の巨木



願成寺の会津大仏

イベント予告情報館

東北歴史博物館オープン講座開催

1 月 22 日（日）13 時 30 分から「過去の歴史地震・火山災害に学ぶ～貞観地震と陸奥国の復興～」(講師：上席主任研究員 柳澤和明氏) が開催されます。

講師の柳澤さんは、H23 年度定期総会の記念講演会で講演をして頂きましたが、その後、歴史学に、地震学、津波工学なども含めた研究を精力的にされています。

今回の講演では、その成果を踏まえたものとして、期待されますので、是非に聴講をお勧めいたします。

なお、講座への参加希望者は、事前申込みが必要ですから、ご注意ください。

問合せ：東北歴史博物館 管理部情報サービス班

TEL 022-368-0106

Mail thm-service@pref.miyagi.jp

編集後記

☆平成 23 年も残り数日となりましたが、今年はその 3. 11 の大震災により、末代までも忘れてはならない年となりました。震災から半月後、石巻～田老まで沿岸部の被災調査に行きましたが、ラジオやテレビからの情報では想像がつかない被災の凄さにただ呆然とするとともに、三陸ならではの被災状況の多様性も感じました。

☆歴史学は未来学ともいわれます。歴史を学ぶ目的として、過去から今、何を学ぶか。また未来に何を伝えるべきか。真剣に考える必要があると思います。その様なか、12 月 7 日に東北大学で開催された「1611 年慶長地震津波 400 周年シンポジウム」などの取り組みは、歴史学、地震学、津波工学の連携として期待されます。

☆被災地の復興計画がようやく出来つつありますが、気になるのは、旧態依然とした人口増・経済成長ありきの社会を目指した計画であるような気がしてなりません。人口減少社会でも心豊かに暮らせる社会を目指した計画であるべきだと思うのですが…。

☆最後になりましたが、新しい年は、皆様にとって、良い年であります様に祈念します。（とし）